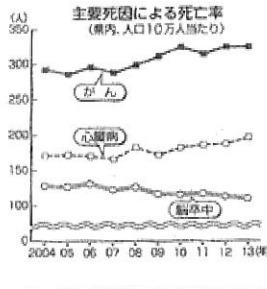


14日 がんフォーラム

病診連携が不可欠



2007年に施行されたがん対策基本法に示されているように、がん治療は、どの地域に生んでいても適切な治療が等しく受けられる医療提供体制を整備する必要がある。

日本人の平均寿命が延び、医療技術も日々進歩する中で、がん患者は増えている。限られた医療

徳島県内にある国指定がん診療連携拠点病院などで組織する県がん診療連携協議会・診療連携部会は14日、県民がんフォーラム「がんの診療連携と相談支援」を、徳島大蔵本キャンパスの大塚講堂で開く。がん治療は、先進医療の提供や術後の経過観察、在宅医療など切れ目のない医療提供体制の構築が欠かせない。部会長を務める徳島大学病院泌尿器科の金山博臣科長に、がん治療における医療連携の重要性について聞いた。(萬木竜一郎)

金山・徳大病院科長に聞く



がん診療における医療連携の重要性について話す金山科長(徳島大学病院)

連携を有効に活用し、治療の均一化を図るには、がん診療連携拠点病院を中心に、病院とかがりつけ医療との診療所が連携した「病診連携」が不可欠。

県内では、徳島大学病院が県がん診療連携拠点病院に、県立中央と徳島赤十字、徳島市民の3病院が地域がん診療連携拠点病院に指定されている。

治療情報共有へ「患者手帳」作成



徳島大学病院が作成したがん患者用の「治療の記録ノート」(患者手帳)

好病院などの中核病院に立腹、食道の各がんで作成した。患者ごとの診療記録、化学療法など計画や治療記録、内服薬の高度医療を受ける際は、がん剤の種類のほか、術後、三好病院に戻って経過の往診点なども記載して経過を観察し、症状が落ちる。

これを保持していれば、患者自身が治療内容や今後の治療方針を知ることができると、どの医療機関を受診しても医師が患者のがんに関するデータ「地域連携クリティカルタや状態を把握できる。バス(連携バス)」が、患者と医師とのコミュニケーションの橋渡しとなり、拠点病院にいる専門医が連携されるシステム。このシステムが、がん治療の連携を深め、がん診療に関する役割分担を明確化することが重要だ。

患者が安心して治療を受けやすいように、5ヶ所ある連携拠点病院が中心となつて数年前から取り組んでいるのが、がん診療の連携だ。そのためには、医療機関が連携を深め、がん診療に関する役割分担を明確化することが重要だ。

県民がんフォーラムは14日午後1時半から4時半まで。県がん診療連携協議会の福森知治会長が「がん診療に対する国および徳島県の取り組み」をテーマに話すほか、肺や胃、大腸など、さまざまながんに関する診療連携や予防法、最新の治療法などの講演がある。無料。問い合わせは徳島大学病院がん診療連携センター(電088-6333-7312)。

暮らし